

友の会主催 解説・鑑賞会

「民藝 MINGEI—美は暮らしの中にある」

解説：村上由美 学芸部長

5月12日(日) 参加者65名

展示会の解説を聴いてよかった！

山脇浩子

柳宗悦は100年前に「民藝的工藝=民藝」を提唱しました。私は駒場の日本民藝館を数度訪れていますが、このような解説を聴いたのは初めてで、聴いてよかったと思いました。

村上由美学芸部長は、I章～III章に分かれている展示を、順を追って各ブースのテーマと見どころを、興味深くお話してくださいました。すぐにでも会場に飛んで行きたくなりました。特にII章の「衣」の展示。鶴と波の柄の藍染め着物。アップサイクルした金糸刺繍が浮き上がっている麻の着物。袖口に細工されている革製の火消し半纏。荒々しい布にチェーンステッチが施されたアイヌのアットゥシ。III章は2階に展示され、日本各地と世界の民藝、そして現代に息づく民藝を紹介。この展示は世界中で起きている問題の窓口ではないか、と感じました。自然素材の材料減、手作業の職人不足、後継者がいないなど、これから生きていく人々への大いなるメッセージとして受け取りました。



友の会主催 第62回 美術館めぐり(日帰り)

神奈川県立近代美術館 葉山館、山口蓬春記念館

5月28日(火) 参加者22名

充実、初夏の鎌倉美術館巡り

海野宣子

期待と不安の初参加でしたが、和やかな雰囲気と充実した行程で満足の小旅行ができました。快適な車中でのおしゃべりは徐々に、山口蓬春に関して世田谷美術館の伊藤まりん学芸員の解説で新日本画というキーワードで未知の画家への興味が高まりました。

今回見た吉田克郎と山口蓬春は私には未知の画家でしたが、神奈川県立近代美術館葉山館と山口蓬春記念館ではそれぞれの学芸員の方から作品を前にお話を伺ったことで作者を近くに感じ印象深いものとなりました。学芸員のお話を聞けるのは友の会ならではの魅力だと思います。山口蓬春記念館では作品鑑賞に加え吉田五十八設計の驚くべき建物、初夏の緑に映える一色海岸の遠景など非日常を堪能しました。

お昼は美しい日本食を頂き、食後は鶴岡八幡周辺で参加者それぞれがお目当ての自由時間を過ごし、充実感と次回への期待と共に帰路につきました。友の会世話人の方々のさりげなくも優しいサポートも心に残りました。



世田谷美術館・友の会共催 解説・鑑賞会

「須田国太郎の芸術 三つのまなざし」展

解説：池尻豪介 学芸員

8月18日(日) 参加者104名

京都への小旅行、再鑑賞の楽しみ

紀伊馬文字

和やかで知的興奮のある講演会でした。絵画・スペイン・音楽をベースに作品背景や展示意図もたくさん教わり、鑑賞の楽しみが増しました。

「展示会開催のご挨拶に訪れた国太郎のお墓は大谷本廟にありまして」とのお話から法観寺や京都市動物園と作品のつながりを写真や地図で解説されたくだけは、さながら京都への小旅行のよう。京大人文研所蔵の《発掘》を文化財建築である北白川分室から「足場を組んで」借り出す様子には、会場からもねぎらうような感嘆の声が上がりました。展示では《発掘》の左右に国太郎が追求した洋の東西を配したと伺った後、もう一度鑑賞する体験は格別でした。

油絵をしない私には技法の解説が新鮮で興味深く、淡色部分ほど厚塗りであることや実物の構図との違い、下絵からの変化などを知って改めて鑑賞すると、その絵に惹かれる理由に近付ける気がしました。

ご子息が設立された財団からの呼びかけで当館への巡回が決まったとのこと。幸運に感謝します。



友の会主催 解説・鑑賞会

ミュージアム コレクション I

「アートディレクターの仕事—大貫卓也と花森安治」

解説：矢野進 学芸員、樋口菜呂奈 学芸員

8月30日(金) 参加者14名

人を惹きつけるもの

台風による悪天候にもかかわらずおいでいただいた方々に向けて、矢野進学芸員と樋口菜呂奈学芸員の思いのこもった熱い解説・鑑賞会だった。

「プール冷えてます」「史上最低の遊園地。」……これらのポスターを当時見たインパクトは今でも覚えている。

広告の役割は、とにかく目立ち、見る者の興味を惹き、その商品を手にとってもらえることと言えるだろう。しかも、この展示で目にするポスターたちのなんとアートしていることか。見る者を驚かせる発想力、アイデア、センス、こだわりが凄い。世田谷美術館で大貫卓也のポスターをこんなに収蔵しているんだということにも驚いたが、収蔵に至る裏話や今回の展示に至る経過の話も興味深く聞くことができた。

花森安治の作る広告も生活者を惹きつける。日常目にしていることに疑問を投げかけてくる。

二人を並べた展示は、どう繋がるのだろうと思っていたが、シンプルで、常識を疑い、見るものの感情に迫ってくる広告は、実はとても共通するものを持っていたということに気づいた。

(友の会広報部)



水彩画講座

講師：板倉美智子

場所：宮本三郎記念美術館

5月15日(水)～17日(金) 全3回 参加者19名

楽しかった水彩画講座

後藤明彦

奥沢に夏のはしりの暑い3日間通いました。透明水彩絵具と油性サインペンで、私は厚めの紙のF6スケッチブックに描きました。3日とも静物画で、3つ用意された6～8人掛テーブルの中央に集められた瓶やグラス、水差し、スカーフ、野菜、果物、流木、生花などを各自好き勝手に描きます。私は、3つのテーブルを巡って3日で3作描きました。

皆さん、サインペンで細密な表現が早くできる方、クレマチスを牧野富太郎よりも繊細に描かれる方、明るい赤や黄のぼかしだけで描かれる方など全く自由で個性的。私は板倉先生から絵筆で水を加えティッシュで拭き取って色のトーンを上げたり、同様に消して最後に指でぼかすなど水彩画らしい表現や、下地にグレーやページュのジェッソを刷毛でべったり塗って、一晚乾かしてからその上に水彩で描くという小チャレンジをご指導いただきました。乾きが早く、この大きさなら一日一作が可能なのも水彩の魅力ですね。



木彫刻講座

講師：三宅一樹

6月7日(金)～8月2日(金) 全9回 参加者24名

初の木彫刻チャレンジ

井上英俊

檜を素材に個々人の彫ってみたいモチーフ制作に取り組んだ約2か月の講座。3回目は素材となる檜の木材選びがくじ引きだったが、お目当ての材料をゲットした人や思い通りにいかなかった人など悲喜交々の様相。ブランクシーの作品見学や3回の大雨を挟みながら、あっという間に終わってしまい、「もっとやりたい!」という気持ちを抑えきれなかった。

三宅先生からは「こうしたい、これをやりたい」といった木と向かい合う情熱、パッションの大切さを大いに学んだ。これ無くして作品無しと言ってもいい。そして多くの人々が陥る「できないことばかりに囚われてしまう」を厳に戒めるべきことも!

私は初の木彫刻チャレンジだったが、単に木彫刻の技術を学ぶだけでなく、日本の建築に欠かせない木にまつわる様々な歴史や国内外の優れた木彫刻作品を、資料を見ながら聞くことができてとても興味深かった。3回目で引き当てた様々な木材の形状にもかわらず素晴らしい作品に仕上げられたのは先生のご指導の賜物か!!

名残惜しくもある講座だったが、存分に楽しめた。



水墨画講座

講師：佐藤良助

6月26日(水)～8月7日(水) 全7回 参加者26名

水墨画講座に参加して

鴨志田千加子

筆を使って何か描いてみたいと思っていて頃、墨を使って表現する水墨画というものがあると知り、初めて参加させて頂きました。

初回は何が何だかわからないまま終了し、3～4回参加すると今回の講座の「墨で遊ぶ」というテーマに沿って楽しむことができ、7回の最後でようやく水墨画とはどういうものなのかが理解できました。墨の濃淡をつくる調墨が大事だということ、筆に水分を多く含むと紙の上で墨は滲んでしまうこと、筆使いによる表現方法の違いなど、初心者の私にとって学ぶことがとても多く、もっとたくさん描いて上手になりたいと思いました。

最後の回の作品鑑賞は、他の参加者の方の作品を拝見することができ、勉強になりました。佐藤先生の毎回の「余談だけどね……」といってお話して下さる内容も興味深く拝聴させていただきました。

とても楽しい講座でした。ありがとうございました。



デッサン講座

講師：早矢仕素子

8月14日(水)～9月4日(水) 全4回 参加者29名

2024年猛暑のデッサン講習

石岡 徹

一日3時間で4回。白い台の上に並んだ石膏、彩色積木や縄等の物体、最終回には人物を二次元の紙面に写し取る。ためらいで始まるが木炭を持つ手が徐々に動き出す。再び描きあぐねる頃合いに講師が僅かに手を加える。それは決まって構図と仕上げの段階で、絶妙の一手により紙面にある未成熟な絵が脱皮し、存在感を増す。そして写し取る単純作業に代わり、表現への意欲が刺激され躍動する。

描きたいのは人類の心象風景、文化変容。言葉では限界がある複雑な全体を一覧で表現したい。例えば世界各地で語られる「河童駒引き」伝説、日本に伝播、変容、土着化した「庚申信仰」と毎年一つずつ水墨画で表現してみたが、物足りなさが残った。世の中の具象をしっかり描き、あわよくば抽象的概念を炙り出したという下心で、デッサン修行を始めた。「日暮れて道遠し」、晩年に今更ながらだが、「冥途の土産」にするのも好い。



世田谷美術館イベント

セタビの100円ワークショップ

井上三津子

世田谷美術館の地下創作室ABでは毎週土曜日の午後1時から3時まで100円で簡単にできるワークショップを行っています。元は小学4年生の授業の一環で鑑賞教室に参加した子どもたちに、また美術館に来て楽しんでもらいたいとの思いで始めたものですが、今では子どもだけでなく大人も楽しめる人気のワークショップになっています。

内容は企画展ごとに変りますが、美術館と鑑賞リーダーが工夫を凝らして準備した企画を、それこそ毎回楽しみにしてリピーターになってくださったり、同じ企画に何度も参加するお客様もいらっしゃる程です。最初は困惑しながら参加していたお客様もだんだん作り上げる楽しさにはまっていき、帰る時には「楽しかった〜!」と喜んでくださると見てるスタッフもとても嬉しい!

みなさんも物作りの楽しさにはまってみませんか?



私のお薦めアート本

『青春ピカソ』岡本太郎著 新潮文庫

河合岳夫

2023年10月26日、友の会アート散歩で南青山の岡本太郎記念館に入館した際、ショップで本書を目にし、また買ってしまいました。6篇の随筆が収められた160ページほどの小さな本ですが、「ピカソの発見」と「ピカソとの対話」は体験談、「青春ピカソ」ほかは美術評論で、内容はとても濃いです。

「ピカソの発見」では、芸術家として著名な両親に、いわばパリに一人置きりにされた岡本太郎(1911-1996)が、ひとかどの芸術家になろうと苦闘する青春の日々を綴っています。岡本が絵を見て涙する場面が二度あり、とても印象的です。一度目はパリに住んで間もない冬の日、ルーヴル美術館でポール・セザンヌの絵を見てその美しさに心を奪われた時で、そしてその二年半後、パリの街角の画廊でピカソの絵を発見します。「これだ! 全身が叫んだ。これこそ、つきとめる道だ」。ものすごい熱量ですね。そういうことで「芸術は爆発だ」の岡本太郎が出来るようになったのでしょう。

岡本は東京美術学校(現・東京芸術大学)を半年で中退したものの、向学心が旺盛で、フランスで民俗学や哲学などを精力的に学びました。多くの著書を物しましたがその達意の文章は見事です。

なおピカソ《ゲルニカ》の歴史的背景については荒井信一著『ゲルニカ物語』(岩波新書)がお薦めです。



みんなのギャラリー

晴れた日は永遠が見える

能美 清

石膏のミューズがつぶやいた。

その時僕は静物画を描く油彩講座にいた。

ミューズは何を見ているのか僕もそっと後ろから覗いた。

晴れた海が見えた、それに荒れていた。構図が見えてきた。すると静物画の仲間のガラス瓶が入れてくれと言ってくるので窓ぎわの一番カッコいい位置に立ってもらった。さらにフェザーペンが俺も俺もと言う、じゃー永遠と一体の雲になってもらうことにした。そんなイメージがすーと出来上がった。あとはどんな要素を入れるか①無機質に感情。②限られた時間のない空間。③非現実の中の現実。④静寂の不気味さ。⑤外の世界とうちの世界。などが画面にいれられるかと意識して創作にかかりました。描いてるうちに抽象と幻想画の要素もできてきたので強調することにしました。うーなんか面白くなってきたぞ、そんな流れで描き上げたシュールリアリズムな作品になりました。この絵で、額縁の中の窓、この仕掛けが私達が見てる対象への信頼は揺らぎ、見るという行為も不安定になることを狙いました。



これからの事業について

- ◎ 美術館めぐり 11月7日(木)
- ◎ 会員作品展 11月20日(水)~24日(日)
- ◎ 油彩講座 1月17日(金)~ 3月7日(金)全8回
- ◎ 美術講座 3月20日(木)予定
- ◎ アート散歩 予定
- ◎ 解説・鑑賞会 企画展・ミュージアム コレクション展ごとに予定

* 2024年度の各事業につきましては実施の詳細が決まり次第、会員の皆様にチラシや友の会ホームページ等でお知らせいたします。

世田谷美術館友の会に入会しませんか!

世田谷美術館エントランスにはラテン語で「藝術と自然は密かに協力して人間を健全にする」と彫り込まれています。館のサポーター・ファンクラブである友の会に入会し、生活に彩りを加えてみませんか。特典や入会手続きは下記へ。

お問い合わせは友の会事務局へ

入会案内(リーフレット)や下記ホームページもご覧ください。

Tel.03-3416-0607
https://setabi-tomonokai.jp/

